

は「香石の一種」を意味する。カールに從えば、
ditū. 2 basti. 2 のうちから 1 の小石を入れたものと
(elayor anyatarana; cf. "in einen Schlauch (oder) eine
Blase", Caland)。

カールは totrena : nagnapracchannah : ms. totrena
nagnah pracchanna (h). 草木に在る nagnah の後で終
極してゐる。カールは nagnas cāsau pracchannas (ms.
pravṛtas) ceti nagnapracchannah, nagnapāvṛta iy arthah
と解してゐる。正確な意味は不明。 Cf. Caland *op. cit.*,
p. 27, n. 1: "Er ist nagnah in so fern er kein Unterkleid,
prachannah, in so fern (nur) ein Oberkleid trägt". Wa-
ckernagel: *Altind. Grammatik* II, 1, p. 172; p. 200 (Speyer
の別説)——totrañ hasitodanah: ms. totrasteno-
dārah, veluka iti prasiddhanāmā: ms. v° in prasiddhān°.
Bloomfield は venuka iti prasiddhanāma と讀んでゐる
(ed. p. 37, n. 13)° n:1 の交雜を極めて稀である (cf.
Vedic Variants II, § 273)° veluka- の確証はなからぬ
から Bloomfield に賛成する。

卷末の Appendix A: Critical notes, references etc. は
A: B: Additional notes は、カールの訳の理解に必要な
参考箇所を克明に列举し、Appendix C は固有名詞・植物

名・動物名等の索引で、共に本書の利用者に多大の便宜を提
供してゐる。H.R. Diwekar, V.P. Limaye, R.N. Dandekar,
C. G. Kashikar, V. V. Bhide: *Kausikasūtra-Dāriabhāṣya*.
Critically edited for the first time on the basis of a single
codex which is reproduced by offset process. Tīlak Ma-
harashtra Vidyapīṭha Post-graduate and Research Depart-
ment Publication. XVI, 36 pp., 136 double pages, 59
pp. (Appendices, Corrigenda) Poona, 1972.

ブリアン・ズナ
「南アメリカ」

藤 勇 造

この書は M・ウェーラー卿が監修者となり、世界各地で
実際の調査活動に携わつてゐる第一線の考古学者が、各々の
専門領域を担当執筆してゐる《New Aspects of Antiquity》
なる叢書の一冊である。著者 B・ズナは、若干記
すと、彼は一九二〇年の生まれ、専攻は美術と建築学である。
第二次大戦後の一九五一年に英政府派遣の建築技師として
マデックに赴き、当時英保護領であつた南イースマンから
アマットへかけての地方を広く踏査し、各地に散在する遺跡
を実際に見聞する機会に恵まれた。そして一九六二年には、

アデンに新設された「古代局」(Department of Antiquities)の長に任ぜられている。これまでの活動の重点は、主として南アラビア(旧英領)各地の遺跡の調査と紹介に置かれており、具体的成果としては、アデンにおける「美術・考古学協会」(Society of Art and Archaeology)の設立、一九六七年にアデンに開設をみた博物館維持のための財団創立などがあげられる。このように、著者は南アラビアの古代遺跡と継続的にしかも長期に亘って接触しそれを調査しえた数少ない人物の一人で、この叢書の南アラビア部門の執筆者としてこれ以上の適任者はいないとさえ言えるのである。しかし、この書は決して専門の研究者を対象として著わされたものではなく、著者自身も序文(ロ二)において認めているように、むしろ概説的な啓蒙書の部類に属するものである。従って当書評欄でとりあげるには必ずしもふさわしくないとも思えないが、我が国においては南アラビア関係の書物が紹介される機会があまりないという事情を考慮し、比較的新しい時期に発表された諸研究の紹介を兼ねて筆を執った次第である。

まず本書の構成を一瞥すると次のようになってゐる。

I 背景

II 歴史、諸王国と美術工芸

III 遺跡

批評と紹介 蔽

注、文献目録、図版索引、索引

第一章で問題とされているのは古代南アラビア繁栄の背景であるが、最初の歴史概観の部分は第二章で改めてとりあげられるので、紹介はそちらに譲る。言語の部で特に注記すべき点はないが、この分野では研究の歴史もかなり古く文献も枚挙に暇ない。その中で比較的まとまりのよいものをあげておくと、まず文法については〔9, 18〕(稿末の関連文献の項参照、以下同じ)、「Paleography」について体系的に述べたものとしては〔28〕、また南アラビア語を含めた南東セム諸語相互の関係をとりあげた最近の研究として〔29〕などがあげられる。宗教の部では、まず前半で前イスラム期の南アラビアの信仰——この問題を包括的に扱ったものとしては〔20, 34〕——について述べた後、後半においてユダヤ教・キリスト教の伝播とそれがひきおこした南アラビアをめぐる当時の国際紛争がとりあげられている。六世紀におこった、ヒムヤル王(当時南アラビアを統一支配していた)のキリスト教徒迫害に端を発するヒムヤル・アビシニア・東ローマ・ササン朝の争いについては、前世紀の中頃より徐々に角度を変えて研究が行なわれて来たが、ここではその一例として、主に碑文史料に基いてこの事件を扱った〔30〕をあげておく。第一章の最後の節は「乳香と没薬」という南アラビア特産の二大香料を

とりあげ、これらの輸出の問題を中心として交易活動の実態を概観している。しかし、香料については、我が国でも既に山田憲太郎氏の該博な研究があり、又当時のインド洋交易についても村川堅太郎氏が『エリョトゥウラー海案内記』の研究を通じて充分明らかにされているところなので、これらの問題についてここでこれ以上立ち入る必要はあるまい。

続く第II章は、まず前半においてこの地に興亡した諸王国の歴史の概略が、大略西から東に国別に叙述されている。美術・建築学が専門の著者はこの方面はあまり得意とは言えないようで、記述に際しても諸文献を適宜利用するに止まり、著者自身の創見と思われるような記事は見あたらない。

まず南アラビアで王国の存在が史料的に確認されるのは、前八世紀末—七世紀初にかけてのアッシリア碑文にサバ王の名前の現われるのを以て最初とするというのが現在の定説となっており、本書もそれに従っている。ただ一つ問題なのは、著者が序文の中で“‘The dates……are generally in accordance with the longer chronologies’” (p. 12) と述べている点である。long chronology なる語は通常、サバ王国に先立ってマイーン王国の存在を主張し、しかもその年代を前十二世紀頃まで溯らせようとする論者達の提唱する年代を指すのに使われ、それに対し、本書が従っているような年代

は short chr. と呼び慣わされている。稀にピレンヌ (9) の如くカタバン王国滅亡の年代を後三世紀まで下げて考えようとする論者の主張を指して long chr. と呼ぶことはあるが、それ以外にこの語が使用された例は見当たらず、本書におけるが如き用法はおそらく著者の誤解に基くものと思われる。

サバに次いで古いアウサーンについては史料が極めて乏しく、ここにあげられている諸王国の中で最も事情が明らかでない。このアウサーンがサバによって滅された前五世紀前後が南アラビアの歴史の一つの変革期で、この少し前よりハドラマウト、カタバンが、前四百年前後にマイーンが史料上に登場する。これから前一世紀へかけて、上記四国が南アラビアの覇権をめぐって一進一退を繰り返した時代の記述にあたっては、主として [3, 4, 32, 39, 41, 42, 45] の如き文献が利用されている。

前一世紀から後一世紀へかけての二百年間は第二の変革期と言える。まず前二世紀末にカタバン領内より独立したヒムヤルは、後一世紀の中頃までにはオケリス、アデン等の重要交易港を含む海岸地帯とその背後の山岳部とをほぼ支配下に収めていた。一方マイーンは前一世紀前半サバの攻撃の前に屈し、他方ヒムヤルの独立によつて弱体化したカタバンも、ハドラマウトの侵略を受けて後二世紀初には完全に滅亡する。以後、南アラビアはヒムヤル、サバ、ハドラマウトの

三国併立時代に入ったが、中でもサバは西方山岳部諸部族の台頭によって内部分裂に苦しみ、その後多少の紆余曲折はあったものの、三世紀後半にはヒムヤルの支配下に入った。またハドドラマウトも最終的にはサバと同じ途をたどり、四世紀前半にはヒムヤルによる南アラビア統一の事業は完成したと思われる。しかしその間にもインド洋交易をめぐるアビシニアとの対立は深まり、キリスト教徒迫害問題も絡んで六世紀には遂にアビシニアの征服を受け、その後ササン朝の支配を経て七世紀のイスラムの征服に至るのである。このヒムヤルの勃興から滅亡に至るまでの部分を記述するにあたり、著者はほぼ全面的に〔43〕に拠っている。その他〔21, 22, 23, 27, 44〕などが参考に供されている。尚ここで気付いた点を一、二あげると、まず著者はマイーンの独立喪失の年代を前一年としその典拠として〔43〕をあげているが、これは明らかに下ウの誤解で、ヴァイスマンは“before the middle of the last century B.C. or earlier” (p. 443) と述べているはずがない。また〔3〕を引いて、マイーン滅亡とサバ(ヒムヤル)紀元の出現とを結びつけて考える説を紹介しているが、この紀元はヴァイスマンによつてヒムヤルの独立に由来すると説明されており (Op. cit., p. 430) 評者にもこの見解の方が説得力を有するよう思われる。また、南アラビア史研究上不可欠の史料である『エリネトトラ―海案内記』の著作年代を三

世紀前半とすること、一言注記を要するであろう。これはビレンヌの研究〔29 (pp. 167-209), 30〕に端を発し、ここ十年ほどの間に特に南アラビア史研究者の中で支持する者がかなりある説である〔5, 6, 43 (p. 478)〕。しかし一般には、ローマの東方交易が最も盛んであった一世紀後半の作というのがほぼ定説化されており、又最近の研究でも二世紀前半説を唱えるものはあつても、三世紀にまでずらそうとする考えには批判的な空気が強い。いずれにしても我が国においてはなじみの薄い説であると思われたので、この機会にちよつと紹介してみた。尚この問題の研究史については〔35, 36〕、さらにその後の新しい研究を知る上には〔15〕が便利である。

第II章の後半は美術工芸に関する部分で、豊富な写真を通して、これまで発見された遺物の主なものが紹介されている。ここは問題の性質上、写真や図版の助けなくしては充分な内容紹介もままならぬので、その試みは一応断念することにして、問題点の指摘と、それぞれの問題に関する比較的新しい文献をあげるに止める。

まず建築の部では特に石工技術が論じられているが、これと同じ問題を扱つた研究に〔1〕がある。また一九五二年にアメリカ遠征隊によつて行なわれたマリブ近郊のアッワーム神殿の発掘は、神殿建築の様式について貴重な資料を提供した

「2」)。さらに、本書では参照されていないが、同遠征隊の一
九五〇—五一年のハジナル・ビン・フメイド遺跡の発掘結果
をまとめた [8 (pp. 13-78)] も、建築技術と様式の推移を時
間を追って調べたものとして重要である。彫刻に関しては、
宗教史の観点から女神像が、また地中海世界との交渉を如実
に示すものとして様式のギリシヤ化の問題が特にとりあげら
れているが、これらのテーマを扱った研究としては [31, 32,
38] 等がある。古代南アラビアの彫刻一般の傾向を知るため
には、写真の豊富な [13 (pp. 5-99, Plates 1-86), 33 (SS,
1-167, 195-279)] も便利な書と言える。土器はさほど豊富
とは言えぬが、その中でも国内産のそれは家事用の粗製なも
のに限られ、良質なものについては外国からの輸入に頼って
いた。一般に土器の製法は南アラビアではあまり進歩しなか
ったようである。その分を補っているのが雪花石膏製の容器
や金属器で、前者は主に祭器に、後者は奢侈品を中心として広
い用途に使用された。そして、北方よりの刺激と影響のもと
に、技術的にも意匠的にもかなりの水準に達していた。これ
らの問題に関しては [8 (pp. 79ff.), 13 (pp. 100-128, Plates
87-92), 14, 16, 33 (SS, 168-194, 279-307)] 等が参考にな
る。貨幣については特にギリシヤ貨幣の影響が極めて濃厚で
ある。文献としては、かなり古くなるが [7] や [19, 29
(pp. 61-65), 40] 等があげられる。

第I・II章が主として文献に拠って書かれていたのに対し、
第三章は著者自身の踏査をもとに各地に散在する遺跡の概要
を紹介したもので、本書の価値もこの部分にあると言える。
ただ一言断っておかねばならぬのは、著者の足跡の及ばな
かった北イエーメンは叙述の対象からはずざされていることと、
著者の踏査の目的はあくまでも遺跡の分布状況の調査にあつ
たため、ここにあげられている遺跡の大部分は表面的に観察
されたにすぎず、実際に発掘されたものの数は未だ極めて少
ないということである。遺跡は大略西から東に英保護領の行
政区に従って節を分け、解説されている。細かな遺跡の名を
列挙したところで大した意味もないと思えるので、特に重要
なものだけをとりあげていく。

第I〜III行政区はアデンを中心として東西に広がる地方
で、アデンの港湾施設や現在でも機能している有名な貯水池
を始めとして、かつて中継交易基地として栄えたと思われる
集落址や、灌漑のためのダムの遺構等、数々の遺跡が存在す
るが、アデンのそれを除いてはそれほど名高いものもなく、
又ついでに調査も行なわれていない。

これに対して第IV行政区の遺跡はいずれも重要で、南アラ
ビアの諸遺跡の中では比較的調査も進んでいる。まずハドラ
マウトのカナはアデンと並ぶ南アラビア有数の交易港として
名高く、特に乳香の積出港として重要な役割を果たした。こ

のカナから北東のハジメル地方へ通ずる山道を遮っているのがカラトの障壁で、ヒムヤルの北進を防ぐためにハドラマウトにより築かれた。この壁面に残されている碑文〔RES 2687〕は、南アラビア碑文中ヒムヤルに言及した最古の例として著名である。またカナより北西にのび、ハドラマウトの首都ンヤブワやカタバンの首都ティムナに通ずる道を抑えていたのが、南ハドラマウトのかつての中心都市マイファアトで、軍事的にも商業的にも極めて重要な位置を占めていた。同じ行政区に含まれるベイハーン地方は、かつてカタバン王国の中心をなした部分で、首都ティムナのそれを始めとする数多くの遺跡が散在している。一九五〇—五一年のアメリカ遠征隊の調査により、南アラビアでも最もよく知られる地方となったが、この時の調査結果は〔II (Part I)〕に詳しい。ティムナにおいては城壁南門付近のいくつかの建築址と中央神殿が発掘され、碑文もかなり収集された。そのうちで最も重要なのは、中央神殿近くのオベリスクに刻まれていたもので〔RES 4337 A, B〕で、国内特に首都内における商取引の統制を内容としている。交易活動に触れた数少ない南アラビア碑文の中では最もよくまとまっておりますり極めて価値が高い。これについては既にビーストンの研究〔5〕が発表されている。このティムナ近郊ヘイド・ビン・アキールにある墓所も同時に調査され、報告書として〔13〕が出ている。しかし既に盗

批評と紹介 部

掘にあつており、期待されたほどの収穫はなかったようである。ここからもかなりの碑文が発見されており、それを研究したものとて〔21, 24〕がある。尚、本書では紹介されていない重要遺跡として、ティムナ南方のハジナル・ビン・フメイドをあげておこう。ここでは土器編年を目的とした南アラビアでは最も徹底的な発掘が行なわれ、建築技法や土器の型式の変化を知る上で貴重な多大の資料が獲られた。その報告書〔8〕は一九六九年に出版されているが、本書の記載には間に合わなかったと見えドウはこれを参照していない。

第四—V行政区にまたがるワディ・ハドラマウト流域にも多くの遺跡が残されているが、そのうち特に重要なものだけをあげると、まずハドラマウトの首都ンヤブワ、ここは訪れた人もかなりの数にのぼり、おおよその輪郭は知られているが、本格的調査は全く行なわれていない。このンヤブワ西方十マイルほどの所にあるウクラは、かつて儀礼的式典の行なわれる場所として重きをなしていたらしい。ここから発見された百以上の碑文については〔33〕に詳しい。またこれよりずっと東方ワディ・アムド流域にあるフレイダは、月神の神殿と墓所が一九三七年にケイトン・トンプソンによって発掘されたことで名高い。実にこれが、南アラビアにおける最初の真の意味で考古学的な発掘であつた〔22〕。

以上が本書とそれに関連した文献の概要であるが、最後に本書の体裁について気付いた点を一、二付け加えておく。まず編別構成について言うと、第二章に諸王国の歴史と美術工芸が並べて置かれているのには非常に奇異な感じを受ける。

内容的にも叙述の方法からいっても性格の異なるこの二つの問題は、やはり章を分けて扱うべきであらう。また第三章で各地の遺跡を紹介するに際して、英保護領の行政区単位を節を分けているのにも賛成できない。過去の歴史の産物とも言うべき遺跡の分布を現在の行政単位で割り切らうとする点にそもそも無理があるのだ。ここは旧王国の境界に従って節を分けるか、それともいっそのような節分けを放棄してしまった方がすっきりした形になったであらう。碑文中に現われる人名や地名の翻字に際しては、著者自身序文の中を断わっている如く、「正確な翻字法にはなほ慣用に従って」(p. 11) 処理がなされている。そしてその結果、本来は同じ文字であるはずのものが異なって表記されたり、或いは逆に本来は別々の文字が同じ形で表記されるというような混乱が所々に生じているのには注意を要する。

尚、本書(英語版)の刊行で先立が一九七〇年と独記本が出版されたこと(Brian Doe: Southern Arabia, London, Thames and Hudson, 1971, 267p, with 8 colour plates, 134 monochrome plates and 41 line drawings. Germ. tr.:

Südarabien. Antike Reiche am Indischen Ozean, Bergisch Gladbach, Gustav Lübbe Verlag, 1970.)

関連文献

1. ADSA……cf. 11. Bowen
2. Albright, F. P., Excavation at Marib in Yemen, ADSA, pp. 215-268.
3. Albright, W. F., The Chronology of Ancient South Arabia in the Light of First Campaign of the Expedition in Qataban, BASOR, 119, 1950, pp. 5-15.
4. id., The Chronology of the Minaean Kings of Arabia, BASOR, 129, 1953, pp. 20-24.
5. Altheim, F., *Geschichte der Hunnen* V, Berlin, 1962, SS. 11-15.
6. id. und Siehl, R., *Die Araber in der Alten Welt* I, 1964, SS. 42ff.
7. Beek, G. W. van, Marginally Drafted, Pecked Masonry, ADSA, pp. 287-299.
8. id., *Hajar Bin Humaid*, Baltimore, 1969.
9. Beeston, A. F. L., *A Descriptive Grammar of Epigraphic South Arabian*, London, 1962.
10. id., *Qataban. Studies in Old South Arabian Epigraphy, Fascicule I-The Mercantile Code of Qataban*,

- London, 1959; *Fascicle II-The Labakh Texts (with Addenda to 'The Mercantile Code of Qataban')*, London, 1971, pp. 2-5.
11. Bowen, R. LeBaron, *Archaeological Discoveries in South Arabia*, Baltimore, 1958.
12. Caton-Thompson, G., *The Tombs and Neon Temple of Haririha (Hadhramaut)*, Oxford, 1944.
13. Cleveland, R. L., *An Ancient South Arabian Necropolis*, Baltimore, 1965.
14. Comfort, H., Imported pottery and glass from Timna' *ADSA*, pp. 199-212.
15. *Der Kleine Pauly*, IV, München, 1972, S. 642.
16. Doe, B., Pottery Sites Near Aden, *JRAS*, 3-4, 1963, pp. 150-162.
17. Hill, G. F., *The ancient coinage of South Arabia*, London, 1915.
18. Höfner, M., *Altsüdarabische Grammatik*, Leipzig, 1943.
19. Irvine, A. K., Some notes on Old South Arabian Monetary Terminology, *JRAS*, 1-2, 1964, pp. 18-36.
20. Jammé, A., Le panthéon sud-arabe pré-islamique d'après les sources épigraphiques, *Le Muséon*, 60, 1947, pp. 57-147.
21. id., *Pièces épigraphiques de Heid bin 'Aql*, Louvain, 1952.
22. id., *Sabaean Inscriptions from Ma'yun Bilqis (Marib)*, Baltimore, 1962.
23. id., *The Al-'Uqlah Texts*, Washington, 1963.
24. id., *Notes on the Published Inscribed Objects Excavated at Heid bin 'Aql*, Washington, 1965.
25. 東三國大鑑臨『サウジアラビア一帯の歴史』岩波書店 1974 年 4 月号 41-45 頁。
26. Murtonen, A., *Early Semitic*, Leiden, 1967.
27. Phillips, W., *Qataban and Sheba*, London, 1955.
28. Pirenne, J., *Paléographie des inscriptions sud-arabes*, Tom. I, Brussel, 1956.
29. id., *Le Royaume Sud-Arabe de Qataban et sa Datation*, Louvain, 1961.
30. id., La date du périples de la Mer Érythrée, *Journal Asiatique*, 1961, pp. 441-459.
31. id., Notes d'Archéologie Sud-Arabe I (Extrait de la Revue *Syria*, 37, 1960, Fasc. 3-4), Paris, 1961; II (*Syria*, 38, 1961, Fasc. 3-4), Paris, 1961; III (*Syria*, 39, 1962, Fasc. 3-4), Paris, 1962; IV (*Syria*, 42, 1965,

- Fasc. 1-2), Paris, 1965.
32. Pliny, *Natural History*, Bks III-VII. (Loeb Class. Libr.)
33. Rathjens, C., *Sabaieca*, II, Hamburg, 1955.
34. Ryckmans, G., *Les religions arabes préislamiques*, Louvain, 1951.
35. Ryckmans, J., *La persécution des chrétiens himyarites au sixième siècle*, Istanbul, 1956.
36. Schoff, W. H. tr., *The Periplus of the Erythraean Sea*, London, 1912, pp. 7-15, 290-293.
37. Segall, B., Sculpture from Arabia Felix, The Hellenistic Period, *American Journal of Archaeology*, 59, 1955, pp. 210ff.
38. id., The Lion-Riders from Timna', *ADSA*, pp. 155-178.
39. Strabo, *The Geography* (Loeb Class. Libr.)
40. Walker, J. R., The Moon-God on Coins of the Hadramaut, *BSOAS*, 1952, pp. 623-626.
41. Winnett, F. V., The place of the Mineans in the history of Pre-Islamic Arabia, *BASOR*, 73, 1939, pp. 3-9.
42. Wissmann, H. von, De Mari Erythraeo. *Stuttgarter Geographische Studien 69, H. Lautensach-Pestschrift*, Stuttgart, 1957, SS. 289-324.
43. id., Himyar, Ancient History, *Le Muséon*, 77, 1964, pp. 429-498.
44. id., *Zur Geschichte und Landeskunde von Al-Šūd-arabien*, Wien, 1964.
45. id., und Höfner, M., *Beiträge zur historischen Geographie des vorislamischen Südarabien*, Mainz, 1952.